慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本語における敬語接尾辞：「さん」「さま」を中心に
Sub Title	
Author	龍見, 雄作
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2022
Jtitle	日本語と日本語教育 No.50 (2022. 3) ,p.116- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	刊行50周年 大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20220300-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』50：116（2022.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

現代日本語における敬語接尾辞
―「さん」「さま」を中心に―

龍見雄作

本論文は敬語接尾辞「さん」と「さま」に関する研究である。「さん」は初級段階の日本語教科書で使用される極めて基本的な敬語接尾辞である。また、「さん」よりも敬意の高い形式として「さま」が存在するが、一般的には書き言葉に使用される。「さま」が話し言葉で使用されるときには、かなり改まった態度が感じられる。しかし、国語辞典にも、役職に敬称を付けた「部長さん」、挨拶に敬称を付けた「お疲れ様」などの例があり、商業施設でクレジットカードの署名を求められる際には、本来所有物に付ける敬称からの連想からか「お名前様」などという表現まで見ることができる。一方で、宗教的な存在である「聖母マリア様」は一般的に共通語では「聖母マリアさん」とはほとんど言わないなど、丁寧さの段階だけでは説明できない交換不可能な「さん」「さま」の用法も見られる。もちろん、方言、男女差、使用する集団、発話の場、などで少しずつ使用意識に差があるため、認定には慎重になることが必要だが、「さん」と「さま」の使用は規範的な用法から、慣用的な用法、さらには誤用に近い新しい用法まで広がりのあることが認められる。本論文の問題意識はそうした敬語接尾辞の使用実態をどのように考えればよいか、という点から出発している。

本論文は、まず、第 2 章で国語辞典にみる敬語接尾辞の意味記述をまとめ、現代日本語における「さま」「さん」の規範を確認する。次に、第 3 章で現代日本語における敬語接尾辞「さま」「さん」を中心に大石初太郎（1986）『敬語』、森田良行（1989）『基礎日本語辞典』などの先行研究をまとめ、国語辞典の記述に見られない用法を補う。第 4 章では木村義之（2016）「敬語接尾辞「さん」「さま」の用法再考」を吟味し、木村の分類（「人称詞・人称詞以外の人物」「親族」「歴史上の人物名・没後間もない著名人・存命中の著名人」「職業」「―屋・―社・―店」「―員・―士・―師・―手」「職位（―長）・職位（―長以外）」「〇〇人（ニン）・〇人（ニン）」「属性・性質」「相対的関係の一方」「階層」「位置」「人数」「動物」「宗教者」「神仏」「あいさつ・慣用語」）をベースとして「さん」「さま」の前接成分を考察する。最後に新たな枠組みとして「所有物」「団体名」「一般人の名前」「名詞以外」という 4 つの項目を追加して考察する。結論としては、国語辞典や先行研究にある原則の延長線上にある現代日本語における使用実態と使用意識を分析した。本論文で取り上げた「お友達様」「ご住所様」といった表現は、用例を探していく中で、当然ないであろうと予測しながらも、思いがけず採取できた拡張用法の例である。このような言い方が出てくるのは「相手に対する敬意の度合いをより一層高めたい」という心理が働いたためであろう。一般に、敬語表現は、その形式が長く使われると、敬意が低下するといういわゆる「敬意逓減の法則」がある。背景には、定型として長く使われた敬語形式に丁寧さが不足していると感じて、何らかの形で敬意を補おうとする意識の中に、「さま」の付加が位置づけられるのではないか、という考え方ができそうである。こうした観点からもこれらはさらに考えていく必要がある課題として用法の広がりを観察していきたい。